

月刊

いじろのとも

第五卷

五月号

彼岸に達する

こちら岸（此岸）

あちらの岸（彼岸）の

安らかさ

知らず迷える

人多し

渡すほとけの

導きを得よ

真理に従え

世の中の

財も名誉も

権力も

子どもさえをも

望まずに

智慧を求めて

道を行け

世俗を捨てて

真理に従え

自己を捨てる

逆説の

如く思えて

自らを

捨て去りてこそ

真の自己得る

人生を考え直して

みたい人は(五)

『老子』解説(四)

今月号は次の、第十四章を見てみたいと思います。

(第十四章) 道は、人間の感覚や認識を超えたものです。つまり、道は、見ようとしても見えませんので、色がないと言え、聞こうとしても聞こえませんが、音がないと言え、手で触れようとしても触れられませんので、形がないと言えます。こうした視覚、聴覚、触覚のような感覚器官でも、色、音、形といった概念的認識によっても、明らかに捉えられないもの、つまり、一つに混ざり合っていて区別がつかないもの、それが道なのです。

このように道は、捉えがたいものですが、しかしその現れである現象は明らかに存在しています。この世の万物は生々流転してとどまらないのに、その本体である道を概念で表すことはできないのです。いつも無に帰っていくのです。状態は無いのに状態

があり、物は無いのに物の現象があるのです。これを肯定的に言えば惚恍 (こうこつ) と呼ぶことができます。

また、道は時間的に恒久です。過去を振り返って捉えようとしてもどこが首か分からず、未来を見ようとして付いていっても、その最後の姿(尻尾)を見ることはできません。私たちは時間的始元としての道を捉えることで、いまの存在を制御しなければなりません。この始元としての道をよく知ることこそが、道の根本なのです。

この章は、『老子』の中でも、老子が書いたであろうことが最も確かであるとされている章です。ですから、いまあげた現代語訳は、分かりやすいように補足を入れてはありますが、かなり忠実な訳です。何度か読み返してみたいと思います。以下、少し解説を加えていきます。

私の「人間精神の心理学モデル」では、人間の精神の働きは、次の五つに分けられます。

- (0) 無意識の領域(煩惱蔵 如来蔵)
- (1) こころの領域(情動 感情機能)
- (2) からだの領域(感覚 運動機能)

(3) あたまの領域(認知 言語機能)

(4) たましいの領域(自我 人格機能)

さて、このモデルを老子の言葉の説明に応用したいと思えます。

現代語訳の書き出しの「道は、人間の感覚や認識を超えたものです」という文章は、このモデルで言えば、(2) 感覚 運動領域と(3) 認知 言語領域の働きのことを言っていることになります。

これら(2)と(3)の働きは、ちょっと難しいのですが、哲学でいう「機械論」的な働きに属するものです。少しだけ説明しておきますと、機械論と言いますのは、この世の出来事や現象は機械的因果律によって全て決定されていると考える立場です。つまり、この世のことはいわば、すべて理屈で割り切れると考える立場で、人間の精神的働きで言えば、この感覚 運動と認知 言語で捉えられる世界が、該当しているように思えるのです。

これに対して、哲学には「目的論」的な立場があるのですが、それは、人間の意識的な行為だけではなくて、自然や歴史上の現象も何らかの目的によって規定されている、と考える立場です。その目的を何と考えるか、最も一般的なものは神とするものなのですが、私には、この世が「神という目的」によって貫かれているのかどう

か、あまり考えたことありませんし、よく分からないのですが、少なくとも人間は目的をもって生きていることは間違いないように思えます。

ところで、その目的をどう設定するのが、人間としてより善い生き方なのか。それを考えることに関わるのが、(1) たましい、と(4) こころの二つの機能領域なのです。

私は、望ましい生き方の理論的な検討をするのが哲学で、その実践の仕方を提供するのが宗教のように思えます。でも勿論、両者は密接な関係にあることは言うまでもありません。

立派な宗教は立派な哲学に裏打ちされていますし、また立派な哲学は立派に宗教を実践している人から生まれ出るものです。

少し横道にそれましたが、老子の道の話に戻しますと、道は、実は老子が言うように感覚や認識を超えているだけではなくて、私の言う、こころやたましいすらも超えていると考えるのです。では、人間だけに自覚できる道は、人間の精神のどこの働きの中に宿っているのでしょうか。

それは、私のモデルで、あと一つだけ残っている(0) 無意識の中にあるのです。つまり、他の四つの意識でき

る働きの中にはなくて、意識でき「無」い精神の働きの中にこそ「有」るのです。人間は意識できるから、他の存在より偉いと思っけていますが、もつと深く考えますと「無」意識の中の、老子でいえば道を知ることができから、他の存在を超えて、否、人間自身をも超えて、神や仏と同じ存在となることができると言えるのです。

このように道が、意識できない働きの中にあるということとは、意識では捉えられないということの意味していません。

では、どうして意識でき「無」い働きの中に道が「有」と、分かるのでしょうか。意識できないものが、意識して分かるというのは矛盾のように思えてきます。

人間を始め、およそこの世に存在するものはすべて相対的です。仏教で言えばあらゆるものは「縁起」して存在しています。自分一人で存在するものは何一つありません。

実は、そこに人間の不安定さの根源があるのです。他に依存しなければ生きていけない不安定さがあるのです。そして、人間だけが、その依存を意識することができのです。その依存とは、生々流転する依存です。他に依存して生まれ、他に依存して病気になる、他に依存して老い、他に依存して死んで行くのです。

しかし、人間には有り難いことに、依存すべき他を意識し、その他を求める心ももっています。そうして、他を求め、他者に定位しないと人間は生きていけないのです。そうしないと、自分の人生が無意味だと感じてしまうのです。なぜ、そうなのか意識的に反省してみても分かりません。何故かしら、人を意識するのです。何故か、人と関係付けて自分の人生の意味を考えてしまうのです。

この他者を求める無意識の心こそ大乘仏教で重要視されてきた「如来蔵」だ、と私は思っています。相対を意識することができからこそ、絶対な仏、如来を求めようとする心も宿していると言えるのです。

実は、無意識には、この如来蔵のほかに「煩惱蔵」と呼べる、自分を活かそうとする生の衝動が備わっています。この生の衝動は、成長して自分のことができることが増えますと、だんだん強まります。そして、それは執らわれとなつて現れてきます。まさしく煩惱ばかりが目立ってくるのです。

しかし、この無意識にある如来蔵と煩惱蔵とが、哲学の言葉で言いますと、弁証法的に統合されるとき、実は、道と呼べる世界を人間は自覚できるようになれるのです。

冒頭の意識文に「一つに混ざり合っていて区別がつかないもの、それが道なのです。」とありますが、それは、このあらゆるものが区別されないで統合された状態を言っているのです。

意識文にもありますように、「本体である道を概念で表すことはできない」のに、私は今、皆さんに私が達した学問上の概念で私なりに、道を説明しようとしています。体験のない人には本当は分からないことなのに、何とか分かって頂こうとして、言葉を越えたものを言葉で表そうとしているのです。ですから、申し訳ないと思うのですが、とても理屈っぽくなってしまう。辛抱して何度か読み返して頂きたいと思います。必ず、なにがしか汲み取って頂けることがあると思います。

再び話を元に戻して、意識文の「いつも無に帰っていくのです。．．．これを肯定的に言えば惚恍(こうこう)と呼ぶことができません。」という部分ですが、先程の心理学で言えば、無意識という無に帰って行き、煩惱蔵と如来蔵とが統合されることを意味しています。そしてそれは心理的には惚恍の状態を生み出すのです。恍惚には、うっとりとする状態と、ぼんやりとして、はつきりとしなない状態の二つの意味がありますが、ここではどちらも含んでいるように思います。

私たち人間が、修行によって無に帰って行くときには、心はどこまでも満ち足りてうっとりとし、いのちにも、何にも、はつきりと区別して執らわれなくてもよい状態が訪れてくるのです。

最後の段落に進みます。ここでは、道が永遠であることを言っています。私たち人間を始めとして、この世のあらゆるものは、時間的な存在です。仏教的に言いますと、刹那(せつな)に生じ、刹那に滅しているのです。しかし、道は永遠

です。ここには書いていませんが、道はさらに、無限であり、絶対なのです。それに引き比べ、私たち存在は、時間的で、有限で、相対です。

このように、道は無限なのですから、始めも終わりもないわけです。しかし、分かりにくいと思うのですが、始元としては存在し続けています。そしてこの世のあらゆる存在を存在たらしめているのです。

この、自分が自分を越えたものによって存在せしめられている、ということを実感として分かるのは、自分の有限なことに気付く時です。それは、自分の能力の限界を意識したり、自分や身内の不幸に出会ったり、自分の子が障害児であったりするときなのです。

この、あらゆる存在を越えて、存在を存在たらしめて

いる始元としての道を知ることが、今の存在を知ることであり、それを制御できるということなのです。人間に即して言いますと、それは自分の心を自由に制御することができるといふことであり、そして、それこそが人間が真の自由に至る道なのです。また、それは人生の真の目的に他ならないのです。

自作詩短歌等選

いざとなれば

いざとなったら
やる気になったら
私には
できる
でも今は

人生は
日毎の暮らしが
大切に
今を生きては
今を死に行く

自己に閉じると

井の中のかわずが
大海を知らないのは
当たり前

死後の世界

霊界の話が
流行している

実は

それは

井の中さえも知らない

現代人が

自国語しか

自己を

知らない人は

定位するものを

自国語も知らない

失っているから

同様に

自己を

自己に閉じている人は

超えたものに

他者が分からないのは

自己を

当たり前

あずけていれば

実は

死後がどうなるか

自分自身も分からない

思いわずらわない

長生きと極楽

世の中の
多くの人の
願うこと

この世では
安楽を得て
長生きし
死んだ後には
お浄土へ
生まれ変わって
極楽を得る
そのため
日々の暮らしで
節制と
精進があると
思い知るべし

屁理屈屋

屁理屈を
重ねかさねて
墓穴掘る
あたま進んだ
大学教師
インテリも
ねたみごころに
執らわれて
過ち重ねし
哀れな衆生

ふしあわせ

金をため
立派な家たて
ふしあわせ

高尚な人

執らわれを
全て捨て去り
暮らす人
苦しきにも
楽しきにも
共にこころは
動かない
高尚なりし
人のこころは

自作随筆選

感じる力の衰え

人間は、歳が行くと体力だけではなく、だんだんと感覚も衰えて行きます。そのことが、自分で一番よく自覚できるのは、視覚です。日本人の平均ですと、四十歳を過ぎると老眼になり始め、五十歳を超える頃には老眼鏡をかけなければ、新聞が読めなくなるのが普通です。

しかし、視覚以外の感覚では、こうした衰えを自分で確かめることはなかなか困難です。例えば、聴覚ですと、自分が軽い難聴になっているのに、相手がはつきりと大きい声でものを言わないからだとか、テレビの音を大きくしていても、これが普通なのだと思ってしまう。よほど難聴が進まないと、自分の能力が低下しているとは思いません。

まして、嗅覚（きゆうかく）や味覚や触覚になりますと、殆ど自分だけの体験では、衰えを確認することが不可能です。例えば嗅覚（きゆうかく）は、かなり個人的な感覚で、日常生活の中でどれほど臭うかを表現するこ

とも、確認することもめつたにありません。さらに、味覚についても、この味がどれほどよいのか悪いのか、辛いのか甘いのか、それを人と比べて客観的に表すことはありません。

他人が、人が塩辛いものを平気でたくさん食べたりのを見て、この人は塩辛さの感覚が鈍いのだと、推測する程度です。しかし、本人は、ただ当たり前のことをしていると思っっているのです。客観評価と自己評価が食い違っているということになっている、と言えます。

人間は、視覚のように客観的基準で自己の感覚能力の衰えが、はつきり分かる場合は別ですが、そうでない、特に嗅覚（きゆうかく）や味覚のような場合には、自分の能力が落ちているとは大抵思いません。

これが、そうした感覚能力ぐらいなら自分だけのことで済みませんが、「人の心を感じる力」の鈍化になりますと、人との関係を含みますから、周囲が被害を被ります。自分では当たり前と思っ、人が傷つくようにことを平気で言ったり、自分への忠告や非難をもっと真剣に受け止めなければならぬのに、平気でいたりします。自分が正しいと思っ込んでいるのです。自己評価と他者評価とが不一致なのに気付けないわけです。

歳をとれば肉体が衰えますので、「感覚器官の感じる

力」の衰えは、器官そのものの衰えとして、誰でもがすぐ理解できませんが、「人の心を感じる力」の衰えは、多くは気付くことができません。なぜなのでしょうか。

それは、実は、歳をとるほど心に自己への執らわれの垢を付けていつているのに、人生の経験を積んだと思うぐらいで、それが心の垢であるとは気付けないからなのです。

このような他者との関係を含んだ社会的な場で、人の心を感じる力の低下が起こりますと、自分では気付かず、どんどん悪業を犯していくこととなります。情けないことです。

「老いては子に従え」ということわざがありますが、これは、いま述べてきたような「感じる力」の衰えに配慮したものだと思います。現実には、「他己」の育っていない人には、歳を取らなくても、そうなっている人もいます。

共に反省し、自らの心の垢を落とし、他己を磨く努力をしたいものです。

釈尊のごとば（二二三）

法句経解説

（八六）真理が正しく説かれたとき、真理にしたがう人々は、渡りがたい死の領域を超えて、彼岸（かなたのきし）に至るであろう。

この偈に出ている言葉の意味は、それほど難しいものはありません。しかし、書かれている内容は、なかなか理解しがたいことのように思われます。

それは、現代のように、「あたま」ばかりが発達し、理屈では分からないが、人の言うことを信じて、そのことを実行する人が滅多にいなくなったからです。その結果、自分が解脱に至る、つまり、死を超えて彼岸にいたる、といった体験を得る人も滅多にいません。ということは、自分の言葉で真理を説ける人もいなくなってしまったことを意味しています。

ですから、解脱に達してもいないのに、達したような顔をして、達したことのない人には分からないのよいことに、口から出まかせに近いことをいって、人を誘い、寄進による金儲けとその金による教団の整備ばかりを目

指す人たちが横行しているように思えます。まさに仏法から言えば末法の時代と言えるのです。

さて、偈の「真理が正しく説かれたとき、真理にしたがう人々は」という部分ですが、いま述べましたように、現在では真理を正しく説ける人は滅多にいません。私は、これまでに真理を説いた人として、釈尊とソクラテスと老子とキリストを四聖として、尊敬しています。いずれ、この「このころのとも」でも、こうした人たちの真理の言葉が現代人にも受け入れられるように、いま取り上げている釈尊、老子以外のソクラテスとキリストについても取り上げて解説して行きたいと思っています。

ですから、皆さんもこうした人の教えにしたがって生きていただきたいと思います。必ず、死を超えて彼岸に至ることが出来ます。

(八七) 賢者は、悪いことがらを捨てて、善いことがらを行え。家から出て、家の無い生活に入り、楽しみ難いことではあるが孤独のうちに、喜びを求めよ。

悪いことを捨てて善いことを行え、と言いますのは、「七仏通戒偈」と呼ばれる(一八三)偈と、半分が同じ

になっています。その偈は次のようなものです。「すべての悪しきことをなさず、善いことを行い、自己の心を浄めること。これが諸の仏の教えである。」

何が善いことで、何が悪いことかは、時代や国によって異なる部分もあると思いますが、少なくとも十善戒はいつの時代でも、どの国でも当てはまるように思えます。

七仏通戒偈の後半の「自己の心を浄める」と言うのが、ここで取り上げた偈の後半では、その一つのあり方として具体的に述べているように思われます。しかもこの偈はまさしく修行をもつぱらとすべき僧侶が、そのためには家を出て、孤独のうちに喜びを見いだすべきことを要求するものです。

もう何度も述べたと思いますが、いま僧侶は出家するどころか、修行をないがしろにし、葬式坊主や、事業家坊主や、観光坊主になりさがって、金儲けに専念し、ゴルフをしたり、酒を飲みに行ったり、魚釣りに興じるようになってしまっています。なんと嘆かわしいことでしょうか。世の人は、坊主は八百屋と同じように、葬式屋だと言っています。一つの職業になりさがってしまっているというわけです。法を説く身が、情けないことです。

次の、孤独ですが、それがなぜ大切なのか、今後モ何

度も出てくることだと思えますので、ここで触れておきたいと思えます。

私たち人間は、他者がいないと生きて行けません。しかし、その他者が、現実のある特定の普通の人だったり、不特定の人であつたりしますと、当然、そうした人を心の頼りにしてしまいます。そうなりますと、そうした相対な人から影響を受けて、絶対な仏の真理を實踐することが不可能になつてしまふのです。

解脱を目指すものが心の支えと（つまり、定位）すべき対象は、自己の中の如来さまなのです。自己の外をいくら探しても、定位すべき不動な対象は見つかりません。ひたすら孤独にたえて、自己の中をのぞき込まなければならぬのです。

その導きとなるのが、本当は、自己が解脱に至っている僧侶なのです。

（八八）賢者は欲楽をすてて、無一物となり、心の汚れを去って、おのれを清めよ。

およそ僧侶たるものが、欲楽を追求するようでは、解脱などには至れません。道元禪師は余技をしてはならないと述べておられますし、弘法大師さまも戒めておられ

ます。

解脱にいたれば、勿論、欲楽を追求したいといった気持ちは全くなくなるのですが、そこに至らないうちは、どうしても追求したくなつてきます。しかし、それに流されては遂には「飲む打つ買う」の放蕩へと行き着く僧侶も出てきます。そこまで行かなくても、ゴルフや魚釣りやカラオケにと、うつつをぬかすことになりかねません。普段からそんな様子を見せていては、在家の人たちが僧侶を、自分らと何らかわらない葬式「屋」ぐらゐに思つてしまつても無理はないと思つのです。

人間は、解脱に至らないうちは、形式が大切なのです。それにたよつていれば、間違いを犯さないでいられるからです。道元禪師は生活全体を禪とみなし、弟子たちを規律の中に生活させました。解脱に至れなくても、僧堂で規律に従つて心安らかに暮らせれば、それがもう解脱と何ら変わらない生活と言えるからです。

次に、無一物となることが説かれていますがこれも、先ず形式から入ることを求めるものです。解脱に至れば、財産に執らわれることはありませんが、そうならなくても、先ず財産を捨てることで、執らわれの最も大きいものを減らし、形式上で解脱に近づくわけです。

最後に、心の汚れを去って、おのれを浄めよと、説か

れています。これは「七仏通戒偈」にも説かれている通りです。心を浄めることは仏教の特徴とされています。それは禅定、つまりヨーガをすることによって達成されます。

(八九) 覚りのよすがに心を正しくおさめ執着なく貪りをすてるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほごされている。

覚りのよすがとは、中村元氏の解説によりますと、覚りを得るために役立つ七つの事柄(七覚支「しちかくし」)のことだということです。それは次の七つです。 択法。教えの中から真実なるものを選びとり、偽りのものを捨てること。 精進。一心に努力すること。 喜。 真実の教えを実行する喜びに、住すること。 軽安(きょうあん)。 身心をかるやかに快適にすること。 捨。 対象への執らわれを捨てること。 定。 心を集中して乱さないこと。 念。 おもいを平らかにすること。

執着なく貪りを捨てるのを喜ぶ、ということとは、前の偈でも述べましたように、先ず無一物になることです。しかも、それを喜んですることです。これは、口では言いますが、とても難しいことです。しかし、真の自由を

得るためには必要なことなのです。

人は、お金をたくさん持っていれば、何でも自由になる、と思いがちです。いのちはお金では買えないかも知れませんが、それ以外のものは何でも自由に金で買える。お金をもっていれば自分の言うことも聞いてくれるし、尊敬もしてくれる。多くの人は、そう思っています。そして、それが自由なのだと考えます。実は、そんなものは自由でも何でもありません。それこそが不自由そのものなのです。人は解脱しない限り、お金を貯めれば貯めるほど、財産が増えれば増えるほど、名誉や地位を得れば得るほど心に垢を付けていくのです。

煩惱を滅ぼせば、束縛から開放される、という最後の部分ですが、これは、今までの記述から意味はお分かりだと思えます。ただ、煩惱ですが、私は、これを完全に滅することはできないように思います。分かりやすくするために、こう書いているのです。できるのは、煩惱に執らわれないようになることだと思うのです。

読者のコミュニケーション

俳句

咳きこみて好きな煙草を置き忘れ
若葉径古跡たずねて一人旅
新緑の山わけ入りて廃校へ
過疎進む廃家つづきに花菖蒲
捨て猫を持って帰れず母の顔
春風邪に喉をいためて曲かえて
春の夕猫と添い寝し掛け布団

(徳島県・小原白峰)

お便り

健康のもと(三) 春が来る度に花は結実し、虫たちは穴を出て一代がはじまる。人は一度世に生まれるだけ。蠅も虫けらも、命を守ることに人に劣らない。

人で天寿を全うしているのは、金さんと銀さん。彼女たちの百年は決して恵まれていないが自然には逆行しなかった。清純な素質は人に愛され、崇められる。小学校には交替で出席したのだから裕福ではなかった。人間本来の食事で育った。

昨今の日本人やペットの犬猫はグルメづくめで、馬や鹿に近づきはしないか?、と健康度の低下を疑わざるを得ない。

無茶苦茶は文字通りいけない。お茶を飲まぬ無茶な人は病の問屋になり、苦いほど濃いすぎるお茶は有害になる。その中間に快適なコク風味が存在する。それは、食物の不純な臭みを消して、特有の風味を引き立てる上品な味わいをいう。コク風味の選別は、舌を守る。その所在は植物の防腐剤で、葉、実、皮、木部の赤身などにある。茶道も、健康学も、漢方も、食事も総てコク風味が左右する。次号からが本論。

(阿南市・片田一郎)

後記

一、いま、庭のハナモモが真っ赤な花を満開にしています。その見事さを、毎日楽しんでいきます。つぼみから眺めていますが、そろそろ散りはじめます。

二、四月二日の夜、外出から帰って来て、戸口の鍵を開けたのですが、どうしたことか、そこに飼犬のエリーの姿が見えません。いつもなら、中から尻尾を振りながら飛び掛かってくるのです。「エリー!」と呼ぶと、やつと来ました。その時、ハッと気付きました。ああ、出

産したのだ。どこで生んだのだろう。あらかじめ用意していた箱をまず見ました。違います。ああそうだ、いつも寝る前には、私が寝に行くまで、引いた私の布団の上で寝そべる習慣がついていましたので、そこにいつてみました。案の定、たまたま引き放しにしていた私の布団の上に三匹の黒い小物が、うごうごと動いているではありませんか。

三、この後記は四月七日に書いていますが、三匹とも日に日に大きくなっています。雄一匹に雌二匹です。柴犬の雑種です。本号がお手元に届く頃にはもう親離れが出来る頃と思います。ご希望の方がありましたら、もらって頂けませんか。

四、親のエリーは、買い物に連れていっても、戸口で静かに、通行人には取り合わず、私が出てくるのをじっと待っています。散歩も交差点ではどちらに行くのか、私に振り向いて確認します。勝手に綱をぐいぐいと引いては行きません。

お便り、質問、感想、詩、短歌、俳句、川柳など、どうぞお寄せ下さい。

<p>月刊 こころのとも 第五巻 五月号 (通巻 五十三号)</p>	<p>平成六年五月八日 (発行人) 中塚 善成<small>ぜんじょう</small> (制作) ユニオンプレス (発行所) ひびきのさと エコーコミュニケーション研究所 〒771 43 徳島県勝浦郡勝浦町星谷 星の岩屋</p>
<p>本誌希望の方は、送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 振替口座 徳島1 38660</p>	